

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本中世禅林における柳宗元詩受容の一側面 : 五山版の書き入れをめぐって
Author(s)	太田, 亨
Citation	中國中世文學研究 , 63-64 : 356 - 375
Issue Date	2014-09-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051468
Right	
Relation	



日本中世禅林における柳宗元詩受容の一側面

―五山版の書き入れをめぐる―

太田 亨

はじめに

日本において柳宗元の詩文集が愛玩されていたことは、現存する柳宗元詩文集の版本や写本、注釈書（抄物）を見れば容易に推察することができる。中でも静嘉堂に所蔵されている柳宗元の詩文集の原形とも言える三十巻本宋版『唐柳先生文集』の残本、蓬左文庫に所蔵されている宋版の『増広註釈音弁唐柳先生集』四十五巻本の書写本、多くの機関に所蔵される中世禅林に刊行された五山版『新刊五百家註音弁唐柳先生文集』³（以下『五山版五百家註本』と略称）、『五山版五百家註本』に施されている多くの書き入れ、両足院に所蔵されている禅僧が残した抄物『柳文抄』⁵等は、日本に現存する貴重な資料であり、継続して精査・整理することが急務であると言えよう。

本稿で取り上げるのは、『五山版五百家註本』に書き入れられた膨大な量の注記（抄文。以下「書き入れ抄」と略称）であり、その中で特に注目するのは、巻四十二・

巻四十三に見られる書き入れ抄である。各機関に所蔵されるそれぞれの『五山版五百家註本』の同箇所には共通する書き入れ抄が見られる。巻四十二と巻四十三には、柳宗元の詩が収められるが、詩を解釈するにあたって、重視した先行の注釈書が存在したことが窺える。

以下、『五山版五百家註本』巻四十二・巻四十三の書き入れ抄を精査し、当時の禅僧がいかなる柳宗元詩集（注釈書）を重視し、利用していたのか、その詩集（注釈書）がどれほどの価値を有するのか、なぜ禅僧がそれを利用したのかについて検討する。その上で、現存する種類の版本における書き入れの重要性について提起したい。

一 共通する「書き入れ抄」の作者について

柳宗元詩に対する膨大な書き入れ抄を見れば、中世禅林において、禅僧は柳宗元の文章を尊崇する一方で、その詩に対しても高く評価していたことが分かる。書き入れ抄の特徴は、作品解釈を補助するために他の注釈書の

注釈を書き留めたものや、禅僧の講義を書き取ったものや、中には備忘のために解釈に直接に関係ない文献を引用したもの等も認められる。『五山版五百家註本』の巻四十二・巻四十三の書き入れ抄はいかなる性質を有しているであろうか。

市川桃子氏は、「柳宗元と日本漢詩」(『中国文史論叢』八号、二〇一二)の中で、「五山文学と柳宗元」という項目を立て、柳宗元の「江雪」「漁翁」「南澗中題」詩を例に挙げ、筆者が注目する書き入れ抄について論じている。国立歴史民俗博物館に所蔵される『五山版五百家註本』の「南澗中題」詩における書き入れ抄に、「批、子厚每詩起語如清吏清峭奇整」「批、精神在此十字遂覺一篇蒼然」とあるのを取り上げて、次のように述べている。

「子厚、每詩起語、如清吏更清峭奇整」「精神在此十字」というような評語を見ると、五山の僧侶たちが単に柳宗元の詩をテキストとして読むのみならず、柳宗元と対峙して、精神的な糧をそこに見いだそうとしている姿勢が窺われる。

市川氏は論の中で、「批」で始まる書き入れを禅僧の評語として捉えている。しかし、この「批」で始まる書き入れは、果たして禅僧の評語なのであろうか。

柳宗元の「南澗中題」詩は『唐詩品彙』巻十五(五言古詩部)にも所収されているが、その注には「劉云、子

厚每詩起語、如法更清峭奇整」「劉云、精神在此十字遂覺一篇蒼然」とある。国立歴史民俗博物館本の書き入れ抄と大体同意であるが、「劉云」とは誰なのか。巻十五において「柳宗元」に注された各人の柳詩評の中に、「劉辰翁曰」とその評者が示されている。つまり、氏が注目された「批」で始まる書き入れ抄は、中国の注釈(評点)という性質を有し、それは劉辰翁の手によることが判明する。決して日本禅僧の評語ではない。

劉辰翁は、紹定五年(三三三)、江西の廬陵(江西省吉安市)に生まれ、字を会孟、号を須溪という。景定三年(三三三)に進士となるが、母の老齢を理由に官途につかず、濂溪書院山長となった。至元十三年(三三六)、南宋は滅亡し、元がそれに代わるも、劉辰翁は元に仕えることをせず、故郷の廬陵で多くの文人・僧侶・道士と交遊し、思うがままに文筆活動を楽しみ、大徳元年(三九七)に没した。宋末元初の著名な評点者として名高い。

二 柳宗元詩の劉辰翁批語

―「書き入れ抄」よりの復元

禅僧は劉辰翁の評語(禅林では「批語」と呼称するたため、以降は「批語」で統一する)をどのような経路で書き入れたのか。まずは『五山版五百家註本』巻四十二・巻四十三に書き入れられた批語を整理する。

確認しうる範囲では、宮内庁書陵部・国会図書館・国立歴史民俗博物館・東洋文庫・東北大学・内閣文庫に所

蔵される『五山版五百家註本』巻四十二・四十三に同様の批語が書き入れられている。

東北大学所蔵『五山版五百家註本』には、巻四十二の巻頭に次のようにある。

須溪先生劉會孟評点

内閣文庫所蔵本にも巻四十二の巻頭に「須溪批点」とあり、「批」が劉辰翁の批語であることが証される。また、国立歴史民俗博物館所蔵『五山版五百家註本』には、巻四十二巻頭に次のようにある。

須溪先生劉會孟評点曰、子厚律詩長句矜重如朴、及小絶平易如不経意。然每説不可為懐、詩之得失可見。長篇點綴精麗、樂府託興飛動、古詩短調紆鬱、清美閑勝。詩総不多而態度備矣。退之固當遜出其下、并言韓柳亦不偶然。

須溪先生劉會孟評点して曰く、子厚の律詩・長句は矜重にして朴なるが如く、小絶に及べば平易にして意を經ざるが如し。然れば毎に讀みて懐ひを為すべからざれども、詩の得失見るべし。長篇は點綴精麗、樂府は託興飛動、古詩は短調紆鬱、清美閑勝たり。詩は総じて多からざれども態度備はる。退之固より當に其の下に遜出すべくも、并せて韓柳と言ふも亦

た偶然ならず。

この評語は巻四十二巻頭に書き入れられている場合もあるれば、詩部の最後に書き入れられている場合もある。劉辰翁は、柳宗元詩について、律詩や長句は自ら慎み飾り気が無く、絶句は平易で心にとまらなにかのようであり、そのため読めば常に思いめぐらすことはなくとも、その詩の得失が現れているとする。そして、長編詩は程良く飾られ麗しく、樂府は興趣に任せ活き活きとし、古詩は短調で気がふさぐも、清美で落ち着いている。韓愈はもとより柳宗元の下に遜るべきであるが、韓柳と併称するのも偶然ではない、と評している。

次に柳詩批語を整理した一覽表を挙げる。本によつては「批云」が無い場合も存するため、批語であるかどうか判断できない書き入れも存する。しかも各本によつて、批語の書き入れ箇所の有無の相違が存する。その点、東洋文庫本は最も多く批語を書き入れており、しかも「批云」と明記している。そのため、一覽表には東洋文庫本の書き入れ批語をもとに、他書の書き入れ批語と校勘したものを挙げた。また柳詩注釈書に引用される批語についても取り上げた。

〈批語一覽表〉

番	巻	詩題	批語箇所	批語
1	42	同劉二十八院 長寄澧州張使 蟻*	盈缺幾蝦 批云	以用為蝦蟇大俚。

11	10	9	○	8	7	6	5	4	3	2									
42	42	42	42	42	42	42	42	42	42	42	42								
登柳州峨山路	衡陽與夢得分	陵李元二侍御	呂衡州兼寄江	同劉二十八哭	開却寄弟	過衡山見新花	因獻長韻	楊尚書寄柳筆	古東門行	侍御簡吳武陵	零陵贈李卿元	禪經	晨詣超師院讀	武陵	初秋夜坐贈吳	弘農公五十韻	弘農公五十韻	君八十韻	
西北是融	便濯纓*	垂淚千行	上景鐘*	不使功名	題注	作妙形*	截玉銛錐	不如土*	萬金寵贈	悲*	低昂互鳴	足*	悟悅心自	竹*	稍々雨侵	長*	徒恨纏徽	彊*	多容競忤
批云	批云、可念。	批云、可歎。	批云	批云	劉辰翁曰、酸楚。	批云、拙語。	批云、結得淒切。	批云、	批云、	暢。	批云、	然去淵明尚遠。是唐詩中轉換。	批云、妙處欲不可盡、	好(批言一二句)。	批云、二語極怨然可念。	批云	批云	批云	批云、競字誤、必寬字

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12							
43	43	43	43	43	43	42	42	42	42	42						
覺衰	與崔策登西山	與崔策登西山	南礪中題	南礪中題	南礪中題	友呂衡州書迹	樹	落盡偶題	見贈其一	內新栽松寓興	酬賈鵬山人郡	楚客憐皇	榕葉滿庭	窮*	采耀將安	州*
尋*	稍已來相	繞*	綏我愁腸	綏我愁腸	綏我愁腸	似分身*	衡陽往事	樹*	楚客憐皇	鶯亂啼*	鶯亂啼*	鶯亂啼*	鶯亂啼*	鶯亂啼*	鶯亂啼*	鶯亂啼*
批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、
批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、	批云、
漸近自然。	漸近自然。	漸近自然。	漸近自然。	漸近自然。	漸近自然。	漸近自然。	漸近自然。	漸近自然。	漸近自然。	漸近自然。	漸近自然。	漸近自然。	漸近自然。	漸近自然。	漸近自然。	漸近自然。

29	28	27	26	○	25	24	23	22
43	43	43	43	43	43	43	43	43
種白囊荷	種白囊荷	江雪	北池 雨後曉行獨至	郊居歲暮	溪居	韋道安	覺衰	覺衰
親* 眇陳心所	癘* 血虫化為	雪* 獨釣寒江	主* 偶此成賓	題注	碧* 長歌楚天	韋道安*	音* 商頌有遺	斟* 朋友常共
甚悲。 直以情事、有致含意、	批云、不言囊荷如何。	批云、此詩雖有天趣、然上兩句竟是躡雪千山万逕影、独由落句五字道尽耳。	批云、諸詩皆極幽怨、而說之蕭然如世外人。同時如退之夢得、皆不能及也。	劉辰翁曰、境與神會、不由思得。欲重見自難耳。	批云、境語神會不由思得、欲重見自難耳。	贊。 有奇語。惜哉、不見其	於達者。	批云、其最近陶者、然意尤佳。

39	38	37	36	35	34	33	32	31	30
43	43	43	43	43	43	43	43	43	43
楊白花	聞黃鸝	聞黃鸝	放鷓鴣詞	歧烏詞	三 行路難三首其	田家三首其二	零陵早春 (曲講堂)	巽公院五詠	零陵 自衡陽移桂植
下長秋*	茫茫曉日 樅行當熟	西林*紫 春意生*	滿眼故園 莫相顧*	同類相呼 逃後患*	努力低飛 異見、欲以常字易之。	夕* 農談四隣	園* 殷勤入故	惟* 忘意聊思	学* 一雨悟無
譬者歌之。	批云、語調適與事情俱美。其餘音杳杳、真可以泣鬼神者。惜不令連	批云、西林必其故園。	批云、語調情景皆至。	批云、傷哉。	批云、亦經事語。	批云、無怨之怨。	批云、小絕皆自在精切。	批云、本色道人語。	批云、此語幾不可解、而覽者或自得也。

40					巖上無心 雲相逐*	批云、或謂東坡評此詩、 無后二句亦可非知言者 也。有可橫截者、如黃 鸝四句是也。此詩氣渾 不類晚唐、政在后兩句、 非蛇安足者。
43	漁翁	詠史	41	43	晏子亦垂 文*	批云、無叙次、無發明。
42		詠三良	42	43	吾欲討彼 狂*	批云、坡公治命有從違、 亦覺用不厭。
43		詠荆軻	43	43	太史徵無 且*	批云、結得比叙事較有 體。
44		掩役夫張進骸	44	43	聊且顧爾 私*	批云、三篇皆擬淵明、 然不如此篇逼近、亦事 題偶足以發爾。故知理 貴自然。

○は蔣之韜輯注『柳河東集』に引かれ、書き入れ抄には見られない批語である。以上が、現在確認される劉辰翁の柳詩批語の復元である。書き入れ批語の数に相違は見られるが、確認できた『五山版五百家註本』に全て書かれていることから、禅僧が劉辰翁の批語をいかに重視していたかが窺える。当時期において禅僧の柳詩考究に当たっては不可欠の資料であったことが分かる。

三 書き入れ批語の原本とその価値について

柳詩に対する批語と作品に対する四十四例にもよる書き入れ批語は、どの詩集（注釈書）から引用されたもので、現在においてどれほどの価値を有するものであるうか。書き入れ批語について、その原本となるはずの『劉辰翁批点柳宗元集』（仮称）は現存しない。禅僧がいずれの書を原典にして書き入れを行ったかが問題となる。

第一に考えられるのは、総集『唐詩品彙』からの引用である。しかし、書き入れ批語には見えるが、『唐詩品彙』には含まれない批語が存する。1・2・3・8・9・10・14・15・24・28・29・30・31・34・35・36・37・38・41については、『唐詩品彙』に作品自体が収められていない。4・6・7・12・26・42については、『唐詩品彙』に作品は収められているものの、劉辰翁の批語が引用されていない。また、『唐詩品彙』においては、例えば27「江雪」詩では「劉云、得天趣、獨由落句五字道盡矣。」、40「漁翁」詩では「劉云、或謂蘇評為當非知言者、此詩氣渾不類晚唐、正在後兩句、非蛇安足者。」、44「掩役夫張進骸」詩では「劉云、學陶不如此篇逼近、亦事題偶足以發爾。故知理貴自然。」となっており、前掲一覽表の書き入れ批語と大きく異なっている場合が存する。これらに拠る限りでは、『唐詩品彙』からの引用ではないことが判明ししう。

次いで、明末の蔣之韜（五六一・六五）輯注『柳河東集』に引用される批語についてであるが、5・11・13・16・17・18・19・23・32・39・40・43・44において引用する

ものの、○印の二箇所については、書き入れ抄には見られない批語である。蔣之翘の生年からして、『柳河東集』の批語を直接に書き入れた可能性は考えられないが、書き入れに見られない批語を引用していることから、書き入れの際に柳宗元詩の批語を全て網羅していないことが分かる。なお、後代になるが、日本の近藤元粹（二八五、元三）も『韋柳詩集』に批語を引用するが、自身で『柳河東集』と『唐詩品彙』を参照したことを明記しており、二書以外の批語を引用していない。

劉辰翁が評点した書について見てみる。焦印亭氏の「劉辰翁評点著作版本目錄」では、次に挙げる書を取り上げている。

散文類	『大戴礼記』・『越絶書』・『班馬異同評』・『史漢異同補評』・『荀子』・『陰符経』・『老子道德経』・『莊子南華真経』・『南華経』・『列子冲虚真経』・『鷹斎三子子口義』・『廣成子』・『古三墳』・『史記評林』・『漢書評林』
小説類	『世説新語』
詩歌類	李賀詩・韋応物詩・孟郊詩・李白詩・『劉辰翁批点三唐人詩集』・『韋孟全集』・『陶韋合集』・『王孟詩評』・『盛唐四名家集』・杜甫詩・王维詩・王安石詩・蘇軾詩・陳與義詩・陸游詩・汪元量詩・『合刻宋刻劉須溪点校書九種』

劉辰翁が評点した詩歌の別集として現存するのは、唐代については、孟浩然・王維・杜甫・韋応物・孟郊・李賀

の六人であり、宋代については、王安石・蘇軾・陳與義・陸游・汪元量の五人である。この中に柳宗元の名は見あたらない。

次いで、劉辰翁が製した選集について見てみる。劉辰翁は、『興觀集』と『古今詩統』を編纂したが、現在ともに散佚している。奥野新太郎氏の指摘に拠れば、『興觀集』は、劉辰翁が評点を施した唐宋の詩の中から佳作を選んで編まれた書であったとされる。また、『古今詩統』は、劉辰翁が自身の文学観と一致する作品を条件とし、周囲の人々の作品をも積極的に集めた書であったとされる。

『唐百家詩選』を校訂したともあるが、王安石が編集した『唐百家詩選』には柳宗元の作品が所収されておらず、劉辰翁が校訂した書については残っていない。かくして、選集からの引用でもないようである。

では、禅僧はいずれから引用したのであろうか。『劉辰翁批点柳宗元詩集』の存在を示唆するのが、次に挙げる『柳文抄』巻二「楊評事文集後序」の抄である。

劉須溪ハ不^{コト}批退之詩山谷詩、語ヲツキニシテ也。

詩文古今不兼意也。柳詩杜詩放翁東坡詩皆批ス。韓

退之ヲハ詩話評之、大家十三ノ詩人ノ中ヘモ不入ナ

リ。退之ハ文無双ナル故ニ詩ヲハエツイラヌ。ソレ

モ詩カ一向ワルイテハナイ故、詩ヲロニ編シタハ人

ニヨマサウトテ也。柳子厚ナレハトテ文ヲトルテハ

ナイ。詩モヨイホトニラクニ編ム也。

劉辰翁の批語について、韓愈と黃庭堅には批語を施さなかつたが、柳宗元と杜甫と陸游と蘇軾の詩には全て批語を施していると指摘している。また中国において韓愈の詩は無双である文に較べるべくもないが、柳宗元の詩は高く評価していることから、前掲の劉辰翁評の存在の影響を見て取ることができる。

『柳文抄』卷四十三「韋道安」では次のように抄している。

子厚所作之傳失之。劉須溪深嘆之云々。

子厚の作す所の傳之を失す。劉須溪は深く之を嘆ず云々。

本詩は韋道安の死を悼んで詠んだ詩であるが、柳宗元は彼の伝記も製したという。卷十七に「曹文洽・韋道安伝」と題目のみ残すのがそれである。そのことに對して、劉辰翁は前表24「以子厚伝、此必有奇語。惜哉、不見其贊。」（子厚の伝を以てすれば、此れ必ず奇語有らん。惜しきかな、其の贊を見ざるを。）と批し、もし伝が残っていたらば、巧みで面白い語句が見られたらうと嘆いている。

『柳文抄』卷四十三「聞黃鸝」でも次のように抄している。

西林紫樞行當熟、須溪云、西林必其故園。

西林紫樞行當熟、須溪云ふ、「西林」は必ず其の故園なり、と。

前表38に見えるように、劉辰翁は、「西の林の紫樞は行くゆく當に熟すべし」の「西林」が、きつと故郷の園のことだろうと批している。柳宗元は永州で囚われの身ながら、この詩で故郷の景色と永州の景色を重ね合わせて詠じていることに對する指摘である。

「韋道安」「聞黃鸝」詩の批語はどちらも『唐詩品彙』には見られない。これは、室町時代初期に『柳文抄』抄者が柳詩を解釈するにあたって、劉辰翁の批語を参照する際、その批語が『劉辰翁批点柳宗元詩集』に収められていた可能性を示唆していると言えよう。

また、禪僧は『三体詩』を愛玩し、多くの抄物を残している。『三体詩』には柳宗元の「柳州二月」詩が収められており、国会図書館所蔵『絶句鈔』には、次のような抄文が認められる。

蘭云、宦情云々、本集須溪批云、其情其景、自不可堪也。

蘭云ふ、宦情云々、本集に須溪批して云ふ、其の情其の景、自ら堪ふべからざるなり、と。

『絶句鈔』において「本集」とある場合、作品の作者の別集を指すことから、ここでも柳宗元の別集を指していると考えられる。『劉辰翁評点柳宗元詩集』が存在した可能性は高いと言えよう。

中世禅林において、禅僧が主として利用していた柳宗元集の注釈書は、『五山版五百家註本』・『増広註釈音弁唐柳先生集』・『柳文音義』の三書である。が、以上の考察から、三書のほかに『劉辰翁評点柳宗元詩集』も新たな一書として加えて良い可能性が高いと言えるのではあるまいか。その完本を見ることはできないが、巻四十二・四十三に対して、禅僧が書き入れた四十四箇所にも及ぶ批語は、柳詩批語のほんの一部でしかないにしても、現在のところ、いまだ日の目を見ることがなかった新たな一書からの引用であるといえよう。特に、少なくとも『唐詩品彙』『柳河東集』に収められていない批語は、現在の柳宗元研究にとつて新出の資料であり、その資料的価値は高いといえよう。

四 劉辰翁の批語について

近年、劉辰翁の批語の特徴について、その研究が報告されている。奥野氏は、作者と同化するることによって、その「情」（作品中の詩句や文字の背景にある作者自身の様々な思い、或いは作中人物のそれを指す）を深く読みとる点にあり、それが「不必可解」等の批語に表れると

される。また、加藤国安氏は、「杜詩評点の特色だが、従来のような考証や典拠の発掘よりも、その芸術性・風格・含蓄などに注目し、例えば、「奇」「老」「氣象」「典」などの詩語の解釈に意を払うなどして、杜詩を詩として鑑賞しようとする姿勢をとる。さらに、比較研究の方法論を用いて、杜詩中の詩句同士の比較や、後世への影響などを論ずるなど、獨創性に富む。」とされる。焦印亭氏も同様の見解を述べられる。

では、柳宗元詩における劉辰翁の批語にはどのような特徴があるのであろうか。前掲の一覽表より、実際に代表的な詩を取り上げ、その批語を確かめてみる。

(1) 「自衡陽移桂植零陵」(巻四十三)について

謫官去南裔、清湘繞靈岳。晨登兼葭岸、霜景霽紛濁。
離披得幽桂、芳本欣盈握。火耕困煙燼、薪採久摧剝。
道旁且不顧、岑嶺況悠邈。傾筐墜故壤、棲息期鸞鷲。
路遠清涼宮、一雨悟無字。南人始珍重、微我誰先覺。
芳意不可傳、丹心徒自渥。

官を謫せられて南裔に去り、清湘 靈岳を繞る。晨に登る兼葭の岸、霜景 紛濁を霽らす。離披として幽桂を得、芳本 握に盈つることを欣ぶ。火耕 煙燼に困しみ、薪採 久しく摧剝す。道旁 且つ願はず、岑嶺 況んや悠邈なるをや。傾筐 故壤を墜ぎ、棲息

鸞鷲を期す。路は遠し清涼の宮、一たび雨ふれば無学を悟る。南人始めて珍重せん、我微かりせば誰か先ず覺らん。芳意傳ふべからず、丹心徒らに自ら渥し。

柳宗元が左遷された南方の僻地を詠じている。大略の意を述べると、明け方に兼葭の岸に登ると、霜が晴れ、茂った草木の中に桂を見つけた。手に握れるほどの桂を喜び、誰にも顧みられないのを惜しんで、もっこに入れて自分の住む寺の精舎に持ち帰り、いつか鳳凰が住処とすることを期待している。精舎までの道のりは遠いが、一雨降れば成長するであろうから何も学ばなくても良い。この木のすばらしさに南人も気付くであろうし、自分も思いが一層強まっていく、と締めくくっている。劉辰翁は、「一たび雨ふれば無学を悟る」に対して次のように批評する。

此語幾不可解、而覽者或自得也。(一覽表30参照)

此語幾か解すべからず、覽る者は或ひは自得するなり。

この語は殆ど解釈しない方が良く、読む者は自ら分かるであろう、とする。詩を熟知した劉辰翁が、読者に対して詩として味わうための読み方を提言していると言えよ

う。この「不可解」は、劉辰翁の批語の特徴とも言える代表的評語である。

(2) 「南磧中題」(卷四十三) について

秋氣集南磧、独遊亭午時。迴風一蕭瑟、林影久參差。始至若有得、稍深遂忘疲。羈禽響幽谷、寒藻舞淪漪。去国魂已游、懷人淚空垂。孤生易為感、失路少所宜。索寞竟何事、徘徊只自知。誰為後來者、當與此心期。

秋氣 南磧に集まる、独り遊ぶ亭午の時。迴風 一に蕭瑟、林影 久しく參差。始め至りて得ること有るが若し、稍や深くして遂に疲れを忘る。羈禽 幽谷に響き、寒藻 淪漪に舞ふ。国を去りて魂已に遊び、人を懷ひて涙空しく垂る。孤り生は感を為し易く、路を失ひて宜しき所少なし。索寞 竟に何をか事とせん、徘徊 只だ自ら知る。誰か後來の者と為らん、當に此の心と期すべし。

秋の氣が南の谷川に集まり、真昼に一人で散策する。この出だしに劉辰翁は次のように批評する。

子厚每詩起語、如清吏清峭苛整。(一覽表16参照)

子厚の每詩の起語は、清吏の清峭苛整なるが如し。

柳宗元の毎詩の出だしの語は、まるで清廉な役人が清く
拔きん出て厳正であるかのようなのである、とする。劉辰翁
が柳詩を読み、その特徴について独特の表現を用いて評
している。

柳宗元は続けて、谷川のつむじ風が物寂しく、林の中
の影が入り乱れている。始め来た時は何か得たようであ
ったが、暫く奥深く入ると疲れを忘れてしまった、と詠
じる。この「始め至りて得ること有るが若し、稍や深く
して遂に疲れを忘る」について、劉辰翁は次のように批
する。

精神在此十字、遂覚一篇蒼然。(一覽表17参照)

精神は此の十字に在り、遂に一篇の蒼然たるを覚ゆ。

精気はこの十字にこめられており、そのため詩篇全体が
物寂しい感じを覚える、とある。作品全体の中で、どこ
が着眼すべき箇所を明示し、その効果を述べている。

詩では続けて、寂しい自然を詠じ、都を離れ、孤独な
自分とこれからの不安を吐露し、最後に、自分の後にや
つて来る人も、私のこの思いに出会うだろう、と締めく
くる。この収束のし方に対して、劉辰翁は次のように批
する。

結得平淡、味乃不可言。(一覽表18参照)

結びて平淡を得、味はひは乃ち言ふべからず。

詩を結ぶに当たってはあつさりとし、その味わいは言い
表すことができない、とある。作品の末句の特徴を端的
に言い表している。劉辰翁の批語は、柳宗元詩の特徴、
作品中の詩句の特徴・効果などを評し、内容に富んでい
たことが窺える。

(3) 「雨後曉行獨至北池」(卷四十三) について

宿雲散洲渚、曉日明村塢。高樹臨清池、風驚夜來雨。
予心適無事、偶此成賓主。

宿雲 洲渚を散じ、曉日 村塢そんに明らかなり。高樹 清
池に臨み、風は夜來の雨を驚かす。予の心事無きを適
へり、此に偶あひて賓主と成る。

この詩は、柳宗元が雨の後の明け方に、一人で愚溪の北
池に行き、そこで得た感懐を詠じている。明け方の清ら
かな情景を詠み込み、自身の心が無の境地にいたり、自
然と一体になり得たことを喜んでいる。これに対して、
劉辰翁は次のように批する。

諸詩皆極幽怨、而讀之蕭然如世外人。同時如退之夢得、皆不能及也。(一覽表26參照)

諸詩は皆な幽怨を極むも、而るに之を讀めば蕭然として世外の人の如し。時を同じくして退之・夢得の如きも、皆な及ぶこと能はざるなり。

柳宗元の多くの詩は皆奥深い恨みを極めているが、この詩を讀むとすつきりとして俗世を超越した人のようである。同時期の韓愈や劉禹錫も及びもつかない、と稱する。ここでは劉辰翁の讀後の感懐と、他の詩人との比較が述べられている。

(4) 「楊白花」(卷四十三) について

楊白花、風吹度江水。

坐令宮樹無顔色、揺蕩春光千萬里。

茫茫曉日下長秋、哀歌未断城鷄起。

楊白花、風吹きて江水を渡る。坐るに宮樹をして顔色を無からしめ、揺蕩たる春光千萬里。茫茫たる曉日長秋を下り、哀歌未だ断ぜず城鷄起つ。

柳の白い花は、風に吹かれて川を渡る。宮殿の木々を顔色なからしめ、揺れ動く春の日差しが遍く照らす。ぼん

やりとした朝日が長秋宮を照らし、哀しい歌声が続く中、城に住む鴉の群れが飛び立つ、とある。「楊白花」は、北魏の胡太后が梁に亡命した魏の武將・楊白花を追慕して詠じた「楊白花歌辞」に基づく樂府題である。『梁書』卷三十九「楊華伝」に拠れば、胡太后は宮人に腕を組み足を踏みならしてその歌を歌わせた、とある。その背景を考慮し、劉辰翁は次のように批する。

語調適與事情俱美。其餘音杳杳、真可以泣鬼神者。惜不令連臂者歌之。(一覽表39參照)

語調適ひて事情と俱に美し。其餘音は杳杳として、真に以て鬼神を泣かすべき者なり。惜しむらくは臂を連ぬる者をして之を歌はしめざるを。

語調が適い、事的情景と共に美しい。その余韻がはるか続き、深く人を感動させるものだという。宋元の変貌を経験した自身の境遇と重ね合わせているのであろうか。そして、惜しまれるのは腕を組む者にこの歌を歌わせることができないうことだ、と胡太后の故事を踏まえた感懐を述べている。

(5) 「柳州二月榕葉落盡偶題」(卷四十二) について

宦情羈思共悽悽、春半如秋意轉迷。

山城過雨百花盡、榕葉滿庭鶯亂啼。

宦情 羈思 共に悽悽、春半ばにして秋の如く、意轉た迷ふ。山城 雨は過ぎて百花盡き、榕葉 庭に満ちて鶯亂れ啼く。

柳州において二月に榕葉が落ち尽くしたのを見て詠んでいる。左遷されたために起こる役人としての思いや僻地において起こる思いは共に痛ましく、春は半ばであるのに秋のようにその意中は定まらない。山城に雨が過ぎて全ての花が落ち、落ちた榕葉が庭に満ち、鶯が盛んに啼いている。この詩に対して劉辰翁は次のように批評する。

其情其景、自不可堪。(一覽表13参照)

其の情 其の景、自ら堪ふべからず。

詩の作者の心情と状景は、自然と思いをこらえることができなくなる、と言う。目の前で宋が滅亡し、元に仕えなかった劉辰翁は、柳詩に自分の境遇を重ね合わせたのだろう。その感懐を述べている。

以上のように、書き入れ批語には劉辰翁の柳詩観が多分に表れていることが分かる。詩を詩として味わうことよって得られた感懐を挙げることもあれば、博学ゆえ

に他の詩人と比較をしたり、詠詩者の立場から詩・詩句・詩語のあり方とその味わい方・読み方を提示したり、時事における劉辰翁自身の感懐を述べたりしている。

中国においては、宋代より評点活動が注目され、元代になると文人間に深く浸透するに至った。詩語の解釈や詩句の典拠を列挙する注釈に較べ、評点には彼地の評点者の詩に対する接し方や考え方が現れているため、読者は作品を読解するにあたって評点者の感覚に近づくことができる。書き入れ批語についても、劉辰翁の柳宗元詩に対する接し方や考え方が述べられているため、彼地に憧憬を抱いた禅僧が、少しでもその感覚を味わおうとして書き留めたものだと解することができる。

五 日本中世禅林における劉辰翁批語について

禅林において、劉辰翁の柳詩批語はなぜ重視されるに至ったのであろうか。この疑問を解決する鍵は、劉辰翁の批語を重視する風潮が柳詩以外の外集にも見られる点に存在しよう。日本禅林において尊重・愛玩された中国の文人に杜甫と蘇軾がいる。杜甫については『集千家註批点杜工部詩集』(以下『批点杜詩本』と略称)、蘇軾については『増刊校正王狀元集註分類東坡先生詩』(以下『分類蘇詩本』と略称)が最も流布、浸透した。二書ともに劉辰翁が批語を施しており、禅僧はその批語を愛玩した。つまり、日本禅林では外集文学を学ぶ上で、劉辰翁の批語が最も尊重されたと言っても過言ではないであろう。

では、劉辰翁の批語が尊ばれたのはなぜであろうか。その重視の背景には、当時期の大陸からの影響が考えられよう。室町時代中期頃、『批点杜詩本』をテキストにして、江西龍派（三七五、三四〇）が講抄したものを記した『杜詩統翠抄』（以下『統翠抄』と略称する）が製された。また、室町時代後期頃には、『分類蘇詩本』をテキストにして、歴代の禅僧の蘇詩解釈を編集した『東坡詩抄』（兩足院藏）が製された。両書には、『詩法源流』『詩法正論』に見られる次の文章を引用する。

曼石掲公語人曰、近年詩流、善評者無如劉會孟。

曼石の掲公 人に語りて曰く、近年の詩流、善く評する者は劉會孟に如くは無し、と。

掲侯斯（三七四、三四四）は「儒林四傑」の一人として、中央においてその博識と文才を高く評価された人物である。その掲侯斯が劉辰翁の批語を最も高く評価している。また「吳清寧文集序」（『掲文安公全集』）でも次のように言う。

須溪、衰世之作也。然其評詩、數百年之間一人而已。
独非子之師乎。

須溪、衰世の作なり。然れども其の詩を評するや、

數百年の間に一人あるのみ。独り子の師に非ざらんや。

多くの詩に批語を施した劉辰翁に対し、數百年に一人の人材であると評価している。

この掲侯斯は、日本禅林と関係が深い。元応二年（三三〇）、天岸慧広・寂室元光・別源圓旨・鈍庵口俊・物外可什等が入元し、杭州天目山の中峰明本に参じた後、袁州の仰山に赴く途中、掲侯斯のもとを訪ねている。そこで掲侯斯は、天岸の師祖・無學祖元の塔銘を撰文している。その期間については分からないが、入元した禅僧が親しく直接に掲侯斯に教示を乞い、その学風を仰ぐことがあったと思われる。杜詩や蘇詩を学ぶに当たり、劉辰翁の批語を尊重する姿勢が伝えられた可能性は大いに存する。また、劉辰翁と日本禅林との関係が深いことは、他の理由も考えられる。『四河入海』で「韓智翊は劉辰翁について次のように述べている。（句読点は筆者の判断による。その他は全て原文通り。以下同じ。）

一云、廬陵——此坡詩ノ批点ヲスル事ハ廬陵ノ劉須溪カスルソ。須溪、字ハ彬之ソ。訶咲隱ナントト同時ソ。咲隱ノ弟子ノ季潭ナトハ絶海ト同時ソ。季潭ハ明朝人ソ。サルホトニ須溪ハ元朝ノ末ノ人テ有ソ。須溪カ詩ノ序ヲハ咲隱ノカレタソ。（中略）此人ハヨク詩ノ道ヲ知タ人ソ。サルホトニ杜詩・東坡詩・

荆公詩ニ批点ヲシタソ。サテ山谷カ詩ヲハ大事ナト
テ批点セヌト云説アリ。又或説ニハキラウタトモ云
カ。キライハセマイソ。

これによると、劉辰翁は元朝末（宋朝末の誤りか）の人物であり、禅僧・笑隱大訶（三六四、三四四）と時を同じくし、笑隱が詩文集の序（筆者未見）を書いたとある。笑隱大訶のもとには季潭宗泐（三三八、三九）や清遠懷涓（三三七、三七五）といった弟子がおり、そこには日本から絶海中津を始め、多くの禅僧が訪れている。

日本禅林において、住持が入院する際の山門・諸山・法眷・江湖等の疏や、葬式や法会に当たって拈香・秉炬・起骨等の法語は、四六駢儷体の文が用いられ、その四六文流行に最も功があったのは笑隱大訶の『蒲室集』である。『蒲室集』は中巖円月によって延文三年に講義が始められたが、最もこれを禅林に浸透させたのは、笑隱の法嗣である季潭宗泐に学んだ絶海中津であると言われる。笑隱の疏法は、以後の禅林に支持され、五山文学の主流となった。このように、劉辰翁の影響を受けた可能性が高い笑隱や季潭の学風が日本禅林に持ち込まれている。

『統翠抄』（巻四）の「晚出左掖」詩項に次のような指摘が存するのは、その一証である。

季潭荷^ハ擔批点^ヲ、俊用章荷擔千家。季潭用章、共雖
為訶笑隱弟子、相異也。大年所取洙注也。勝定国師

用批語也。

季潭は『批点』を荷擔し、俊用章は『千家』を荷擔す。季潭と用章は、共に訶笑隱の弟子爲りと雖も、相異なるなり。大年の取る所は洙注なり。勝定国師は批語を用ふるなり。

季潭宗泐と用章廷俊は、共に笑隱大訶に従学し、笑隱より法を嗣いだだが、季潭は劉辰翁評点『批点杜詩本』を支持し、用章は黄希・黄鶴補注『集千家註分類杜工部詩』を支持した。そして、「勝定国師」、つまり絶海中津（三三六、三四四）は、季潭の影響を受け、『批点本』の批語を重視したことが書かれている。劉辰翁の批語を重視する風潮は大陸からもたらされたことが分かる。

また、絶海は季潭より柳宗元の詩についても学んだようである。『絶句抄』（国会図書館蔵）の「柳州二月」に次のようにある。

村翁抄云、惟肖云、絶海在唐時、季潭以柳子厚柳州
二月詩指示云、為子厚集中第一也。惟肖亦云、此詩
於唐人詩中、不多見之也。歎美之也。

村翁抄に云ふ、惟肖云ふ、絶海の唐に在りし時、季潭柳子厚の柳州二月詩を以て指示して云ふ、子厚集中の第一と為すなり、と。惟肖亦た云ふ、此の詩唐

人詩中に於いて、之をみることも多からざるなり、と。之を歎美するなり、と。

希世靈彦（四〇三〇四六）の抄において、昔惟肖得巖（三三〇一四七）が語つたことの中に、絶海が中国において季潭から「柳州二月」詩が柳宗元の詩の中で最もすぐれていると教示されたことがあるという。大陸において柳宗元詩を学び、その時に劉辰翁の批語についても言及があつたのではあるまいか。

次いで、以後の中世禪林において、劉辰翁の批語はどのように受け入れられたのであろうか。惟肖得巖は「村菴藁叙」（『東海瓊華集』）に次のように言う。

聽松閣下、以希世壬寅藁一百首見示、需之評点。今茲才半歲餘耳。此外必有不登藁者、何其多哉。名章俊語、篇々皆然、連珠疊璧、拙目輒可定其價乎。然敵命弗得而拒、頗加批改。豈謂至當。近世劉會孟、采少陵・東坡・昌谷・簡齋全集、或批或点、會孟豈出于杜蘇之上耶。但述管見而已。觀者毋誚焉。閏十月初三日、歌即道人岩謹志。

聽松閣下、希世壬寅の藁一百首を以て示され、之に評点を需む。今茲に才か半歲餘なるのみ。此の外必ず登藁せざる者有れば、何ぞ其の多きや。名章俊語、篇々皆な然り、連珠疊璧のごとければ、拙目もて敵

ち其の價を定むべけんや。然れども敵命得て拒まず、頗か批改を加ふ。豈に至當と謂はんや。近世劉會孟は、少陵・東坡・昌谷・簡齋全集を采りて、或いは批し或いは点せども、會孟豈に杜蘇の上に出でんや。但だ管見を述ぶるのみ。觀る者誚むる毋かれ。閏十月初三日、歌即道人岩謹んで志す。

応永二十九年（四三三）、惟肖は、細川満元より希世靈彦の百首の藁を示され、それに評点を付けるように求められている。その見事な文章に対して、拙なる眼力の自分では評価のしようがないと謙遜しながらも、敵命であるが故に批改を加えたという。そして、それが果たして妥當な批改と言えようか、と遠慮ししつつ、劉辰翁が杜甫・蘇東坡・李賀・陳與義全集の詩に対して、評点を付しなからも、自身の詩才が決して杜甫や蘇軾より長けていなかったことを挙げ、自らを弁護している。ここでは、禪林において劉辰翁が批点の名家として高く評価され、その詩を見る目が卓越していたことを認めていると言えよう。また、正宗龍統は希世靈彦の伝記「惠鑑明照禪師道行記」を製するに際して上記の叙文を引用するが、そこでは「采少陵・東坡・昌谷・簡齋全集」が「閏少陵・東坡全集」となっている。この異同は、禪林で杜甫と蘇軾が尊崇され、盛んに読まれたことが影響している。そのテキストとなったのが『批点杜詩本』と『分類蘇詩本』なのである。

『批点杜詩本』が流布した様子について、天隱龍沢は『黙雲稿』の中で次のように言う。

本朝禅林耆宿、太年心華太白諸大老、口義惟夥。後学抄以留之於中筭、留之於机上者、幾家哉。獨心華臆斷與劉氏評点、盛行于世。

本朝禅林の耆宿、太年・心華・太白の諸大老、口義惟れ夥し。後学抄して以て之を中筭に留め、之を机上に留むる者幾家ならん。獨り『心華臆斷』と『劉氏評点』のみ、世に盛行す。

室町時代中期以降に、盛んに杜詩の講義が行われ、多くの注釈が創出されたことを述べ、その中で『心華臆斷』と『批点杜詩本』が盛んに世に流布していたことが記されている。

『分類蘇詩本』は、禅林において講義のテキストとして用いられ、笑雲清三が大岳周崇の『翰苑遺芳』・瑞溪周鳳の『脛説』・万里集九の『天下白』・桃源瑞仙の講釈を一韓智翎の聞書きした『蕉雨余滴』の各抄物を編集して製した『四河入海』の底本となっている。『四河入海』では、作品中のそれぞれの詩句を取り上げて各抄物の注釈を列挙するが、詩句と同様に劉辰翁の批語も取り上げ、それぞれの批語について、各抄物の解釈を収めている。蘇詩の受容においても、批語が重視されていたことは一

目瞭然である。

批語重視の実態をさらに詳しく見ると、江西龍派は『批点杜詩本』の批語について、「晚出左掖」（『統翠抄』巻四）詩項に次のように言う。

江西云、凡千家注雖好、批点ニテ批語ヲ讀則好矣。不可不讀批語矣。

江西云ふ、凡そ『千家』は注好きと雖も、『批点』にて批語を読めば則ち好し。批語を読まざるべからずと。

江西は『集千家分類杜工部詩』の注が良いことも認めているが、『批点杜詩本』の批語を読めば事足りると言わんばかりであり、批語は必ず読まなければならないとまで言い切っている。『統翠抄』では、批語に中国人が自身の感性から発した感懐、詠詩における留意事項、他詩との比較・考証が述べられていることを指摘し、そのことを踏まえた上での江西の抄が示されている箇所が随所に見られる。江西が認める批語の特徴は、先に示した柳宗元詩における批語の特徴と同質である。

総じて、『統翠抄』巻四「奉陪鄭駙馬韋曲二首其一」詩項で次のように言う。

唐人真実相傳、義理コソ面白ケレ。日本ハ何トスレト

モハタケ水蓮^{すゐれん}。謂心華等也。太白傳勝定、勝定傳季潭也。

唐人は真実相傳の義理こそ面白けれ。日本は何とすれどもはたけ水蓮なり。心華等を謂ふなり。太白は勝定より傳へられ、勝定は季潭より傳へらるなり。

ここでは、中国人が実際に行った相伝の解釈こそが面白いとし、日本人がどんなに注を施しても畑で水泳の術（水蓮は水練）を練習するように、空理空論に過ぎないとする。つまるところは、絶海、太白へと伝えられた、批評を踏まえた中国人・季潭の解釈が面白いのである。この江西の総括の表現の根底にあったのは、季潭における批評の存在であつたと言えよう。

かくして、中国禅林の学風の影響を受け、批評重視の風潮が日本禅林にも流布・浸透するにいたつた。日本中世禅林においては、柳宗元を読解するに当たり、独立した書冊の存在は未確認ながら、杜詩や坡詩を読解するのと同様に、柳宗元詩の批評に対しても、愛玩・敬意が払われたのであろう。禅僧は批評を参照しつつ、その解釈を深化させていったと想像する。

まとめ

中世禅僧は、中国の書物を頗る愛玩・尊重した。彼地に憧憬を抱く禅僧は、彼地の文学動向に絶えず注目し、

彼地の文人の作品読解・感懐・考証を何よりも重視した。当時期に彼地では批点が行われ、その第一人者である劉辰翁の批評は、詩を詩として味わい、詠詩を教導する姿勢を有しており、禅僧の嗜好を十二分に満たすものであつた。杜詩や蘇詩の抄物には、批評を支持する発言が随所に見られ、禅僧がいかに批評を支持していたかが見て取れる。

その劉辰翁を尊崇する風潮は柳宗元詩にも及んだ様子である。劉辰翁が評点した柳宗元詩集（未確認）が禅林に持ち込まれると、その批評を『五山版五百家本』に書き入れた。現存する多くの『五山版五百家本』に同様の批評が書き入れられていることから、劉辰翁の批評を利用して柳詩の読解を深めていたことが察せられる。

現在、『唐詩品彙』や『柳河東集』に柳宗元詩の批評が見られるが、実際にはそれ以外にいささかの批評が存することを明らかにした。書き入れの批評は、柳詩批評を全て網羅しているわけではないが、散佚したと想像される柳詩批評を可能な限り復元しうる資料と言えよう。

書き入れ抄は禅僧が柳宗元詩を探究した貴重な結晶である。柳詩のみならず、まだ目の目を見ない膨大な量の結晶に今一度光を当て、後世に示すことは研究者の重要な責務の一つであると考える。

注

(1) 拙稿「静嘉堂文庫所蔵宋版『唐柳先生文集』残巻について

て『東方学』第一二二号 二〇一一年) 参照。静嘉堂文庫の宋版『唐柳先生文集』の僚卷は散佚したと思われていたが、平成23年度東京古典会創立100周年記念古典籍展観大入札会において、当該僚卷が競売にかけられた。概観したところによれば、漱芳閣文庫を出た後に行方不明とされていたが、印記より不忍文庫(屋代弘賢)に入ったようである。また不明とされていた構成であるが、巻十五は「賛」「箴戒」、巻十七は「序中」、巻十八は「序下」、巻三十は「啓」であり、作品についても、多少の出入があることが分かった。残念ながら何れの所蔵機関の有に帰したかは不明である。御示教を賜りたい。

(2) 拙稿「蓬左文庫所蔵鈔本『増広註釈音弁唐柳先生集』について」『中国文史論叢』第八号 二〇一二年) 参照。

(3) 拙稿「五山版『新刊五百家註音弁唐柳先生文集』について―五山版の再検討をめぐって―」『文学』一二巻第五号 二〇一二年) 参照。

(4) 拙稿「建仁寺兩足院所蔵『柳文抄』の編纂者について―国立歴史民俗博物館所蔵五山版『新刊五百家註音弁唐柳先生集』書き入れ者との関係―」『国語国文』第七八巻第一号 二〇〇九年)・「東北大学所蔵五山版『新刊五百家註音弁唐柳先生文集』について―書き入れ抄文の検討―」『中国古典文学研究』第九号 二〇一二年) 参照。

(5) (10) 拙稿「兩足院所蔵『柳文抄』について」(兩足院叢書『柳文抄』(臨川書店) 所収 二〇一〇年) 参照。

(6) 拙稿「柳宗元を学んだ禅僧たち―韓愈との比較―」『漢

籍と日本人2』『アジア遊学』第一一六号) 二〇〇八年) 参照。

(7) 機関によっては閲覧に時間がかかるため、確認できた機関を挙げた。なお、路璐氏「内閣文庫蔵五山版『新刊五百家註音弁唐柳先生文集』の書き入れについて―巻四十二・四十三「古今詩」を手掛かりとして」『学林』五八号 二〇一四年)に、内閣文庫蔵本の巻四十二・四三における書き入れが劉辰翁の評点であることに触れられている。ただし、氏は内閣文庫蔵『五山版五百家本』に多くの書き入れがなされている中で、他機関の『五山版五百家本』の書き入れと比較することなく、「劉」や「批」といった人物や評点であることが明示されていないにもかかわらず、特定の書き入れ抄を劉辰翁の評点であると断定しておられることに奇異の感を抱いた。書き入れ抄は、市川桃子氏が日本禅僧の解釈と間違えられた程の内容であるにもかかわらず、根拠が明示されることなく劉辰翁の評点だと断じられる点は不可解であった。

(8) 焦印亭氏『劉辰翁文学研究』(中国社会科学出版社 二〇一一年)

(9) 奥野新太郎氏「元代文学における「采詩」―劉辰翁の佚稿『興觀集』『古今詩統』をめぐって―」『九州中国学会報』四七号 二〇〇九年) 参照。

(11) 奥野新太郎氏「劉辰翁の評点と「情」」『日本中国学会報』六二号 二〇一〇年)・高津孝氏「宋元評点考」『鹿児島大学人文学科論集』三二号 一九九〇年)に、劉辰翁の批点に対する批判についても論究されている。呉牧雲『劉辰翁』(世説新

語》評点研究』（国立中央大学碩士論文 二〇一一）第一節

(三) 三「關於劉辰翁詩文評点和文学理論的研究」に劉辰翁の評点に対する歴代の評価がまとめられている。

(12) 前掲(11) 奥野氏論文参照。

(13) 許総著・加藤国安訳『杜甫論の新構想』（研文出版 一九九六）第四章第五節「杜詩評点本・評論集本の縮矢」の訳注参照。

(14) 焦印亭氏「劉辰翁的文学思想」（『劉辰翁文学研究』所収）

(15) 日本に『批点杜詩本』が流入し、流布した背景については、拙稿「日本禅林における中国の杜詩注釈書受容——『集千家註分類杜工部詩』から『集千家註批点杜工部詩集』へ——」（『日本中国学会報』第五十五集 二〇〇三）参照。

(16) 『黙雲稿』の資料については筆者未見。芳賀幸四郎『中世禅林の学問および文学に関する研究』（日本學術振興會 昭和三十一年）による。

(17) 禅僧が『批点杜詩本』の批語にどのように接していたかについては、拙稿「禅林における杜詩注釈書受容の側面——『杜詩統翠抄』の場合——」（『漢籍と日本人』『アジア遊学』第九三号）二〇〇六）参照。

*本稿は、二〇一三年六月一日、愛媛大学で行われた第五十九回中国四国地区中国学会大会での研究発表に基づきます。その後、路璐氏の論文が発表されましたが、本稿の域を出るものではないと判断し、内容を改めることなく公表いたしました。